灰谷健次郎

兎の眼

理論社刊

長編小説 兎の眼 灰谷健次郎

理論社刊

兎の眼

一九七九年七月　第二十二刷
定　価／九八〇円
著　者／灰谷健次郎
制　作／小宮山量平
発行者／山村光司
発行所／株式会社理論社
東京都新宿区若松町一〇四
電話(03)二〇三－五七九一
郵便番号　一六二
振替　東京九－九五七三六
乱丁・落丁本はお取替えいたします。
印刷・加藤文明社

0093-90219-8924
© Kenjiro Haitani 1978　Printed in Japan

長編小説

兎の眼

目次

プロローグ 5
1 ネズミとヨット 15
2 教員ヤクザ足立先生 23
3 鉄三のひみつ 32
4 悪い日 46
5 鳩と海 60
6 ハエの踊り 70
7 こじきごっこ 81
8 わるいやつ 90
9 カラスの貯金 99
10 バクじいさん 109
11 くらげっ子 120
12 くもりのち晴れ 131

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

13 みなこ当番 141
14 泣くな小谷先生 152
15 さよならだけが人生だ 160
16 ハエ博士の研究 169
17 赤いヒヨコ 179
18 おさなきゲリラたち 189
19 不幸な決定 201
20 せっしゃのオッサン 211
21 ぼくは心がずんとした 222
22 波紋 232
23 鉄三はわるくない 242
24 つらい時間 252
25 裏切り 260
26 流れ星 270
エピローグ 281

カバー・とびらの絵は、グルジアの放浪画家ニコ・ピロスマナシビリ（一八六二―一九一八）の《優しきけものたち》を主題とした作品に依る

プロローグ

鉄三のことはハエの話からはじまる。

鉄三の担任は小谷芙美先生といったが、結婚をしてまだ十日しかたっていなかった。大学を出てすぐのことでもあり、鉄三のその仕打ちは小谷先生のどぎもをぬいた。

小谷先生は職員室にかけこんできて、もうれつに吐いた。そして泣いた。

おどろいた教頭先生が、あわてて教室にかけつけてみると、鉄三は白い眼をして、一点をにらみつけていた。まわりで子どもたちがさわいでいた。

鉄三の足もとを見て、教頭先生ははじめ、なにかきれいな果物でも落ちているのかと思った。それから、それをのぞきこんで思わず大声をあげた。

それは、二つにひきさかれたカエルだったのだ。そのカエルはまだひくひく動いていた。ちらばった内臓は赤い花のようだった。

教頭先生はしばらく立ちつくしていたが、こわがって泣いている女の子がいるのに気がつくと、はやくそのカエルを始末しなくてはならないと思った。それで鉄三をおしのけた。すると、かれは左の足でもう一匹のトノサマガエルをふみつぶしていたのである。

小谷先生はいろいろ考えた。
あのざんこくな殺し方は、よほどつよい憎しみがないとできるものではない。
まてよ、と小谷先生は思った。鉄三は学校のすぐうらの塵芥処理所に住んでいる。とうぜんハエも多いにちがいない。カエルのえさ採りが原因で、なにか友だちといさかいがあったのではあるまいか。
小谷先生がそう思ったのには、多少のわけがあった。処理所から通学してくる子どもはゴミ屋とかバタ屋とかいってからかわれることがあって、学校で問題になることが多かったのだ。
だが、よくわからない。……そうだとしても、なぜカエルを殺す必要があったんだろう。
小谷先生はカエルのえさをどこでどうして手に入れたのか、子どもたちにたずねてみた。すると処理所にはいりこんで、ハエをとった子どもがふたり名のって出た。ゴミの上で四、五匹とったという子どもと、処理所の人の家のそばで、ビンの中のハエを十三匹とったという子どもで、小谷先生は、ビンの中のハエということばを、ちょっとへんだなとは思ったが、そのときはかくべつ気にとめず、つぎの質問をしてしまった。
ビンの中のハエを十三匹とったというのはたしかにへんだ。ビンの中にハエが十三匹もいるものだろうか。もちろん、たくさんのビンがおいてあって、そのビンからすこしずつハエをあつめていったということも考えられるけれども、それにしても不自然な話である。もし小谷先生が、そのことに気がついて、へんな話の意味を調べていたら、ことの真相はそのときにすっかりわかっていたはずであった。
ふたりの子どもは鉄三のあんないで処理所にはいったのではない、といった。鉄三はともだちがひとりもいないこと、カエルに生きたえさをあたえなくてはならなくなったときから鉄三はカエルの世

話をすこしもしなくなったことなど合わせてしゃべった。けんかもしたことはないと、ふたりは口をそろえていった。

けっきょく、小谷先生はなにもわからなかった。

ふたたび事件がおこったのは、それから二カ月ほどたったころである。

アリの観察が、その時間の学習で、小谷先生はアリに巣作りをさせるためには、観察ビンのまわりに黒い布をまいておくとよいという説明をしていた。なにげなく前の子どものビンをとって話をはじめて数分たったとき、とつぜん鉄三が立ちあがった。そして、あっというまに猟犬のように小谷先生にとびかかった。

思わず小谷先生はひめいをあげた。ひめいをあげたとき、小谷先生はもう先生ではなくなっていた。小谷芙美というただの若い女だった。恐ろしいものきたないものをはらいのけようとして、気のくるったように鉄三をはらい落とした。

ほかの子どもたちも、鉄三はとつぜん先生をおそったと思った。しかし、鉄三が小谷先生の手からビンをむしりとったのを見て、そのビンをうばうために、そうしたのだということを知った。

ビンの持主は文治といったが、そのつぎにおそわれたのは文治だった。文治がひめいをあげたとき、かれの顔は血だらけになっていた。鉄三の爪で切りさかれた皮膚が、赤いえのぐをつけた布ぎれのように、ぴらぴらしていた。——鉄三の攻撃は、それでもとまらなかった。

顔をかばった文治の手に、鉄三の歯がくいこんだ。文治のはげしい泣き声に、死にものぐるいで鉄三を引きはなした小谷先生は、文治の手から白い骨がのぞいているのを見ると、その場に卒倒してしまったのである。

職員室で、鉄三は教頭先生になぐりたおされた。ほかの先生たちも、文治が顔や手から血をしたたらせて、泣きわめきながら病院にはこばれていくのを見ていたので、だれも教頭先生の暴力を非難しようとはしなかった。いくらぶたれても鉄三は口をひらかなかった。泣きもしなかった。はじめ鉄三をかわいそうに思っていた女の先生も、そんな強情な鉄三を見ているうちに、教頭先生の暴力はやむをえないことだと思うようになっていった。

小谷先生は保健室でねていたので、教頭先生が鉄三をつれて家へいった。臼井貘というかわった名のために、バクじいさんと呼ばれている鉄三の祖父の前で、鉄三はふたたびお仕置を受けたが、ついに、かれの口はひらかずじまいだった。

よく日、小谷先生は学校を休んだ。二日休んで三日めに小谷先生は学校にきた。きれいな先生だという評判なのに、その日の小谷先生はすこしも美しくなかった。

昼すぎに、バクじいさんが学校へやってきた。小谷先生になにか話をしてかえっていった。そのとき小谷先生はあわてたような顔をした。そして長いあいだ考えごとをしていた。

子どもたちが下校するのをまちかねたようにして、小谷先生は文治の入院している病院へいった。ねている文治をおこし、二ヵ月前に、処理所へはいってとったハエはビンの中にいたものかとたずねた。小さな声で、文治はそうだとこたえた。どうしてビンごと家へもってかえってしまったの、あれは鉄三ちゃんのものだったのよ、とすこし怒ったような声で小谷先生はいった。中国産のジャムがはいっていて、ビンのかたちがかわっているからすぐわかるそうよ、あなた、あれをアリの観察ビンにしたでしょう、と小谷先生はことばをつづけた。

文治ははずかしそうに、ごめんといった。それで小谷先生の顔がすこしやわらかくなった。ビンの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

中にハエがたくさんはいっていたので、そのままもってかえったが鉄三のものとは知らなかったの、と文治は答えた。

鉄三ちゃんにあやまりなさいね、と小谷先生はいって、自分もなにか決心をしたようであった。

つぎの日、小谷先生は鉄三を職員室に呼んだ。そうしてあなたにあやまらなくちゃいけないわときり出した。あなた、ハエをあつめていたんでしょ、ビンに入れてためていたのね、カエルのえさがすくないので気にしてくれていたんだわ、それがなくなって、あなた怒ったんだ、あなたの気持を知ろうとしないで、ほんとうにごめんなさいね、と小谷先生はいった。

鉄三はだまっていた。表情はすこしもかわらなかった。

ゆきちがいというものは、とんでもないところからアブのようにとんでくるものだ。

よく日、文治の父が職員室へどなりこんできて、そのために職員室は大さわぎになった。けがをさせられたうえに、けがをさせたものにあやまれとはどういうことだといって、小谷先生の胸ぐらをつかんだ。そんなことになれていない小谷先生はまっ青になって、口もきけなかった。

とめにはいった教頭先生はなぐりかかられるし、それを制止した若い先生も、あついお茶のはいったコップをぶっつけられた。

ともかく文治の父を、校長室におしこんで校長先生が話をしようとしたが、いちど、たけりくるった文治の父はなかなか平静にならず、どうにかこうにか話がついたときには、かわいそうに小谷先生は人相がかわるくらい泣きはらした顔をしていて、いまにもぶったおれそうだった。

小谷先生がごく平凡な医者のひとり娘で、両親から大切に育てられて大きくなったことを知っている校長先生は、彼女がそのショックにたえられるかどうか心配をした。

その夜、小谷先生は小さな子どものように校長先生に送られて家へ帰った。よく眠れない夜をすごした小谷先生は、その朝になって学校をやめたいと虫がうめくようにつぶやいた。

もちろん学校をやめたいという小谷先生の願いは、まわりの人たちにかんたんにつぶされてしまった。そういうことをいちいちきいていたら、学校の先生は十年もたてばひとりもいなくなってしまう、と小谷先生をからかう同僚もいた。

小谷先生は学校で仕事をしていても、どこか心がひえている自分を感じた。はじめ、かわいいと思っていた子どもたちも、ちょっとしたゆきちがいで自分に害を加えることもあるのだと思うと、かわいいとばかり思っていられないと身がまえるような気持になっていた。小谷先生はまい日、うっとうしい気分で学校へきた。

この学校はH工業地帯の中にある。T駅をおりて学校に近づくと、そこは煙霧(ガス)で終日どんよりしており、学校にはいると、小谷先生はいつも軽いめまいがするのであった。

この学校は、すぐとなりに塵芥処理所があるために、さまざまな被害を受けていた。

その処理所は一九一八年につくられ、それいらいほとんど改良を加えられていなかった。そのため煙突から出る煙はもうれつで、においもひどかった。

灰をとりだすころには、学校にも人家にも白いものがふった。低学年の子どもたちは、雪やこんこといってふざけていたが、高学年になると腹を立てて、役所に抗議文をおくりつけたこともある。

もちろん処理所をほかの場所に移すという計画もあるにはあったが、なかなか実行に移されそうになかった。選挙のとき、どの政党もそれを公約にするが、いっこうにはたされないので、人びとはS町の七不思議といっていた。

処理所のことをすこし説明すると、ゴミを焼く炉は三基あって、その炉はごくかんたんなしかけになっている。焼却口は二階にあって、あつめられたゴミはそこから下の焼却室に落とされる。もちろんその前に、ゴミは燃えるものと燃えないものに、あらく分けられている。燃えにくかろうとくすぶろうと、燃えきるまで、ただ時間をかけてまっている。だから焼却口から落とすゴミのかげんで、能率がよかったりわるかったりした。だいたい二十四時間で一区切りがついて、灰が落ちる。灰のたまるところは地下室ふうになっているが、とり出し口は運ばんのつごうで道路に面している。

灰のとり出しは午前中におこなわれた。灰をかぶるので、たいてい作業員はふんどし一つで、そばで見ていると、なかなかそうれつだ。しかし、ときにはスプレーの空カンが破れつしたり、ガラスの破片で手足を切ったり、たいへん、きけんな仕事でもあった。焼却場のよこには大きな雨天体操場のような建物があった。処理しきれないゴミをここにためておく。梅雨のころに、ここにゴミがたまると、くさったものの熱で、部屋全体がむっとした。

この建物からすこしはなれたところに、処理所で働いている人たちの家屋が、十四、五けんハーモニカ長屋ふうにならんでいた。

鉄三の家はこの長屋のいちばん東のはしにある。

ここで働いている人たちは、大まかにいって二つに分けられた。

一つは役所の職員でコンクリートの建物の中で事務をとったり、現場で働いている人たちのかんとくをしたりしている人で、この人たちは夕方になると、それぞれの家へかえっていった。

いま一つは、役所に臨時でやとわれている人たちで、おもに現場で働いている。ゴミを分けたり、燃やしたり、灰をとり出したりする人たちである。

処理所の中の長屋に住んでいるのは、この人たちなのである。
小谷先生が、この処理所のよこにある学校にきて、夏休みまでの四カ月におこった事件をならべてみると、ここの地域の子どもたちのようすがよくわかる。
交通事故は四件、ちょうど一カ月に一件。死亡事故はなかったが、車にひっかけられて三十メートル引きずられた子どもは六カ月の重傷をおった。
交通事故以外の重傷がもう一件ある。製鋼所の屋根にすみついている鳩をとろうとして転落したので、新聞に大きく出た。学校の責任もいろいろいわれたので、学校とすれば、これがいちばん大事件であったようだ。スーパーマーケットの万引は月に数回、ときには十数回もある。子どもの家出が一件。親の家出はよくあるが、これはいちいち学校で調べきれない。大事にいたらなかったが浮浪者が校内にはいって女の子をつれだそうとした事件、鉄三がおこしたような事件は、さほどめずらしいことでないので、数のうちにはいらない。この場合は小谷先生が大学を出たばかりだというので、ほかの先生の関心があつまったにすぎないのだ。
じっさいこの学校はたいへんな学校である。勤めている先生にまで、へんなのがいる。ある日、小谷先生は子どものかいた作文をだれかにみてもらいたいと思った。
だれに、と考えて、足立という先生を思った。児童詩や作文の著書があるときいていたので、足立先生のことを思ったわけだが、小谷先生は、ちょっと、ちゅうちょした。足立先生はあまり評判がよくなかったのだ。
髪を長くのばしていたし、背広ネクタイというきちんとしたかっこうからほど遠い服装をしていて、小谷先生にはちょっとだらしなく見えた。

かけごとなどして私生活がみだれているという噂もきいていた。ただ、どういうわけか、ほかの先生はこの足立先生に一目おいているようなところがあり、それは父兄の評判がいいからだと、だれかにきいたこともあるような気がした。

が、ともかく足立先生のところへもっていった。教室にはいると、足立先生は子どもの机をならべて、その上でねていた。小谷先生はあきれて、なるほど教員ヤクザというあだながあるそうだが、まったくそのとおりだわ、と思った。

「先生はいつもそんなふうにねているんですか」

小谷先生がたずねると、

「まあ、な」と足立先生は乱暴な口をきいた。

それでも子どもの作品をよむときは、ちゃんとイスにすわった。

小谷先生のさし出した作品をよんで、足立先生は笑った。

「いい作品だね。こういう作品が生まれるところをみると、まだ、タカラモノをねむらせているかもしれんな」

「どういう意味ですか」

「ほかにもよい作品があるのに、あなたが見落としているかもしれないということ。作品だけでなしに人間もね」

そういわれて、小谷先生はきゅうに不安になった。

「臼井鉄三に手こずっているようだけれど、ぼくの経験からいうと、ああいう子にこそタカラモノはいっぱいつまっているもんだ」

小谷先生はびっくりした。

鉄三があいう事件をおこしたことを知っているのはかくべつふしぎでもないが、二千人近い児童数の学校で、ほかの学年の子どもの名まえをおぼえているということはたいへんなことだ。

ほめてもらったのはうれしいが、足立先生のいうことはよくわからない。

鉄三にタカラモノがつまっているかもしれないといったけれど、タカラモノってなんだろう、鉄三は文もかかないしおしゃべりもしない、どこにタカラモノとやらがかくされているのだろう、と小谷先生はそのとき思ったのだった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c